
『訓民正音解例』と朱子学の陰陽五行論

小 林 寛

要約

『訓民正音』は「癸亥冬」に成立し、「正統十一年九月上澣（1446年上旬）」に公布された。『訓民正音』の制定にかかわった鄭麟趾らの『訓民正音解例』の文字制定の解釈には朱子学からする人間把握が色濃く影を落としている。本稿においては朱子学の陰陽五行論からする人間観と、『訓民正音』における文字の解釈における人間観との連関を示しておきたい。

キーワード：『訓民正音』・『訓民正音解例』・朱子学・陰陽五行論

はじめに

本稿においては朱子学の陰陽五行論からする人間把握と、『訓民正音』における文字の成り立ちと『訓民正音』を解釈する『訓民正音解例』における文字解釈に現れる人間観との連関を示しておきたい。特に『太極図説』と『訓民正音解例』の文字解釈における人間観の連関を示しておきたい¹。

1 『訓民正音』と『訓民正音解例』

（1）世宗大王と『訓民正音』

「朝鮮」王朝第四代の王である世宗大王（1397－1450）は『訓民正音²』を制定した。『訓民正音』は「癸亥冬」に創制され「正統十一年九月上澣」に公布されたことが鄭麟趾の後序に記される。この記述が1443年に創成され、1446年上旬に公布されたという根拠となる。

癸亥冬、我殿下創成正音二十八字、略掲例義以示之、名曰訓民正音³

（癸亥の冬、我が殿下は正音二十八字を創成し、略ぼ例義を掲げて以て之を示し、
名づけて曰く訓民正音と。）

正統十一年九月上澣、資憲大夫 礼曹判書 集賢殿大提学 知春秋館事 世子右賓
客 臣鄭麟趾、拜手稽首謹書⁴

（正統十一年、九月上澣、資憲大夫 礼曹判書 集賢殿大提学 知春秋館事 世子右賓
客 臣鄭麟趾、拜手稽首して謹書す。）

1446年に公布された『訓民正音』には世宗大王自らの「序」として次の言が掲げられている。

國之語音，異乎中國，與文字相不流通，故愚民，有所欲言，而終不得伸其情者，多矣，予為此憫然，新制二十八字，欲使人人易習，便於日用耳⁵

（國之語音は中國に異なり，文字と相ひ流通せず。故に愚れな民は言はんと欲する所有りて，終に其の情を伸ぶるを得ざる者，多し。予は此が為に憫然として，新たに二十八字を制し，人人をして易く習はしめ，日用に便ならしめんと欲するのみ。）

国号を「朝鮮」とする李朝にあって，国独自の文字を制定することには，「中国」に対する配慮が求められる。「国の語音は中国とは異なっており，文字とたがいに流通することがない。だからあわれな民は，言いたいとおもうところがあっても，ついにはその情をのべることができない者が多い。わたしはこのために憫れみのあまり，新たに二十八字を制って，人々にたやすく習わせ，日用に便であるようにさせたいとねがうだけである」という。ここでは国の独自性については表だって言われていない。「ひとびとにたやすく習わせ日用に便であるようにさせたいとねがうだけである」と，他意がないことが明言される。中国や中国の文化に反するわけではないことが言外に語られている。しかしながら，中国とは異なる文字を新たに制定するのであるから，「国」の独自性を打ち立てる政策の一環にある。世宗大王は「至誠事大」を標榜しながらも，外交的には独自性を持って対外的に対処した。女真に対して「征伐」を掲げて攻撃をし，あわせて北方に四郡を置いた。日本に対しても倭寇対策の一環として対馬を攻略した。明に対しても，また，日本に対しても，領域の確保拡大を図る世宗大王の意図の中に『訓民正音』制定があり，この「序」には独自性の確立の意図の一端を読み取ることができる。

（2）鄭麟趾と『訓民正音解例』

『訓民正音』に文字解釈を付した『訓民正音解例』を次に見ておくこととしたい。『訓民正音解例』は鄭麟趾（1396－1478）によって記述された。儒教，特に宋学たる朱子学を文字創出の基本の理論として説明が付されている。道学の淵源とされる太極や万物論をしめす『太極図説』において，万物は一太極であると明言されている。『訓民正音解例』では，あらゆるものは陰陽，五行を離れては存在しないという。

天地之道，一陰陽五行而已，坤復之間為太極⁶

（天地之道は一陰陽五行のみ。坤復の間，太極を為す。）

「天地の道は一陰陽五行があるだけであって，坤卦と復卦との間に『太極』がある」という。ここから「太極」に基づく陰陽五行観によって，言語が説明されていることが明らかに知られる。「天地の道には陰陽五行しかない」という。したがってこの世界のあらゆる現象は陰陽五行で成り立ち，陰陽五行に則って制定された文字は「天地の道」をそのまま表すとの解釈をしている。天地のすべ

てを表現できる文字であることが意識され表明される。『訓民正音解例』によれば「訓民正音」は天地自然の道理を窮めて自然に得られる文字であると語られる。努力をしないで自然に正しいことが行われるというこの把握は朱子学の聖人観に淵源がある。

聖人不假修為而自然也⁷

（聖人修為を假らずして自然なり。）

朱子学には、聖人は自然に成し遂げる「生知安行」の存在であるという聖人観があり、これに則った概念で世宗大王の事績が語られているのは、世宗が聖人であると位置づけられていることが示されていることになる。『訓民正音』の文字創成は「修為」すなわち人間の作為によってできたものではないという。

正音之字只廿八，探賾錯綜窮深幾，指遠言近牖民易，天授何曾智巧爲⁸

（正音の字、只だ廿八，探賾錯綜して窮深幾を窮む。遠きを指さして言は近く，民を牖きて易し。天授，何ぞ曾て智巧もて爲さん。）

「正音の28字は、深い幾をさぐりさがし窮めてえられ、遠くを指さしねがいながらことばは近くにあり民をみちびくのにたやすいのであって、天（ものの道理）がさずけたもので、どうして智巧によって為されたものであろうか」といい、訓民正音は人為で作られるものでないことを強調する。人知を傾けて制作した文字であっても、制作に関わった学者の言葉として、天を体現した聖人たる世宗が天の道理を反映した才知によって道理を窮めて自然にできたものであるとする。「中国」や「朝鮮」という「国」地域を越え出た「天地の道理」がこの文字は表すことになる。天の理とは具体的には陰陽五行論を示し、中華の文化の精髓でもあるととらえられているのであるから、正しく道理を反映した文字は中華の文化をも内包しうる可能性があることになる。すなわち、世の中のすべてのものを文字に表現できるという王朝の自負心が反映する。

2 朱子学の陰陽五行論

（1）陰陽論 五行論

陰陽論については中国の春秋戦国時代以前からあった素朴な発想を起源としていて、鄒衍（前3世紀頃）によって五行説と結びつき陰陽五行説として完成すると説明される⁹。許慎（後漢）の『説文解字』によれば陰と陽とは、日陰と日向との象形によって説明される。

一方、五行論は『呂氏春秋』（前3世紀頃）にはかなり整っていて、『尚書（書経）』『洪範』には五行思想が象徴的に表れている。「洪範」には「朝鮮」にかかわる箕子伝承が色濃く語られる。

武王勝殷，殺受立武庚，以箕子歸作洪範

王乃言曰，嗚呼箕子，惟天陰騭下民相協厥居，我不知其彛倫攸叙¹⁰

(武王殷に勝ち，受を殺して武庚を立つ。箕子を以て歸して洪範を作る。

王，乃ち言ひて曰く，「嗚呼箕子，惟れ天，下民を陰騭して厥の居を相協せしむ。我は其の彛倫の叙する攸を知らず」と。)

「武王は殷に勝って，受を殺して武庚を立てて，以て箕子を歸せしめて洪範をつくった」という。『尚書』では箕子は武王によって「朝鮮」に封じられ，箕子の「朝鮮」があったと記す。李朝の儒者もこれを事実として伝えられてきた¹¹。儒教の経書に殷の王家の一族である箕子の言葉が記述されて，治世の帝王学ともいべき「洪範」の内容が武王に伝えられたというのであるから，孔子，孟子が出現するはるか以前に，儒学の伝統からすれば，夏殷周の三王朝をつらぬく中華の王化の精髓が，箕子によって「朝鮮」に流れ込んでいたことを意味することになる。「王の言にいわく」とし，武王は次のように語ったとされる。「ああ，箕子よ，これ天は下民を陰騭して，その居を相協せしめた。我は其の彛倫の叙する攸をしらない」と。武王は治民の常道を順序立てる方法を知らないので教えてほしいと箕子に頼んだということが五経の『尚書』に語られ，これによって周の統治が整ったことになる。『尚書』「洪範」で語られるのが五つの要素によって世界を説明する五行論であった。李朝の儒学たる朱子学にとって，五行論は中華の文化を形成する基本となるものでもあった。朱子学においては，陰陽五行が本体論とも言うべき「太極」とかかわって述べられる。

(1)「太極図説」

朱子学の「太極」は『易経』の「太極」に淵源を有し，周濂溪（1017－1073）の「太極図」によって発展の契機を得る。朱熹（1130－1200）は「太極図説」によって自らの哲学体系の根拠として太極を位置づけた。「太極図」には次のように記される。



太極図

(○此，所謂「無極にして太極」也。即ち陰陽にして，其の本體を指し陰陽を雑へずして言を為す耳。
 ◎此，○の，動きて陽，静まりて陰也。中の○は，其の本體也。ㄱはㄴの根也。ㄴはㄷの根也。
 ☯此，陽變じ陰合して水火木金土を生ずる也。
 ○此，無極二五妙合する所以にして間無き也。○乾男坤女，氣化する者を以て言ふ也。各其の性を一にして，男女一太極也。○萬物化生，形化する者を以て言ふ也。各其の性を一にして，萬物一太極也。

ここには図の説明が付されている。まず「○ 此は所謂『無極にして太極』である。すなわち、陰陽であって、その本体を指して、陰陽を雑えないで、言いあらわすだけである」とし、萬物の根源である太極から説き起こされる。図において「太極」は○で表される。しかし○の内外があるわけではなく、無極を表すのに○を象徴的に用いたのみであることになる。これに次いで、陰陽が語られる。「☉ 此は○が動じて陽となり、静まって陰となるのである。まん中の○はその本体である。☯は☰の根である。☷は☷の根である」とし、太極から「陰陽」が生じることが示される。そして「☵ 此は陽が変じ陰が合わさって水火木金土を生ずる（ことをあらわす）のである。☶ 此は無極と二五が妙合する所以であって、すきまが無い（ことをあらわす）のである」として「五行」が示される。図において陰陽と五行とは線でつながっていることに注意されねばならない。さらに続けて「○『乾男』『坤女』とは『気化』することを言うのである。それぞれその性を一にしている男女は一太極である」といい、気化によって説明する。そして「○ 万物が化生して、『形化』することを言うのである。それぞれその性を一にしている万物は一太極である」といって今度は形化をもって語る。

このことについて「太極図説」には次のように説明して語られる。

無極而太極，太極動生陽，動極而靜，靜而生陰，靜極復動。一動一靜，互爲其根，分陰分陽，兩儀立焉，陽變陰合，而生水火木金土，五氣順布，四時行焉，五行一陰陽也。陰陽一太極也，太極本無極也，五行之生也，各一其性，無極之真，二五之精，妙合而凝，乾道成男，坤道成女，二氣交感，化成萬物，萬物生生，而變化無窮焉，惟人也，得其秀而最靈，形既生矣，神發知矣，五性感動，而善惡分，萬事出矣，聖人定之以中正仁義而主靜，立人極焉，故聖人與天地合其德，日月合其明，四時合其序，鬼神合其吉凶，君子修之吉，小人悖之凶，故曰，立天之道，曰陰與陽，立地之道，曰柔與剛，立人之道，曰仁與義，又曰，原始反終，故知死生之說，大哉易也，斯其至矣¹²

（無極にして太極。太極動じて陽を生じ、動極まりて靜、靜にして陰を生じ、靜極まりてまた動ず。一動一靜、互に其の根と爲りて、陰に分かれ、陽に分かれて、兩儀立つ。陽變じ陰合して、水火木金土を生ず。五氣順ひ布て四時行る。五行は一陰陽なり。陰陽は一太極なり。太極はもと無極なり。五行の生ずるや、各の其の性を一にす。無極の真、二・五の精、妙合して凝る。乾道、男を成し、坤道、女を成し、二氣交感して萬物化成す。萬物生生して變化窮まり無し。惟だ人のみ、其の秀を得て、最も靈なり。形既に生じ、神、知を發す。五性感動して、善惡分かれ、萬事出づ。聖人、之を定るに中正仁義を以てして、靜を主として人極を立つ。故に聖人と天地と其の德を合し、日月と其の明を合し、四時と其の序を合し、鬼神と其の吉凶を合す。君子これを修めて吉、小人これに悖りて凶。故に、天の道を立てて曰く、陰と陽と。地の道を立てて曰く、柔と剛と。人の道を立てて曰く、仁と義と。又曰く、始めを原て終りに反る、故に死生の説を知ると。大なるかな易や。ここに其れ至れり。）

ここでは「極りの無いものが、いちばんの極りである」という。太極を無極であると解釈する部

分は朱子在世当時から議論を呼んだものであった。すべてのものがそこから生じる太極は形もなく何もないと形容されながらすべてを含む万有でもあることになる。何もないようすがかえって何ものをも有する意味をもつ。「太極が動じて陽を生じ、動が極まりて静、静にして陰を生じ、静極まりてまた動ず。一動一静、互に其の根と爲りて、陰に分かれ、陽に分かれて、兩儀立つ」という。太極から陰陽が現れると位置づける。言うまでもなく時間的経過を意味するというよりも論理的に存在を語っているとみてよい。そして「陽變じ陰合して、水火木金土を生ず」として陰陽と五行とが連関して語られる。何もない太極から陰陽五行が生じるのであるから、陰陽五行論は万物の在り方を示す天地の道理であることになる。「五氣順ひ布て四時行る。五行は一陰陽なり。陰陽は一太極なり。太極はもと無極なり」という。無極、太極、陰陽、五行、四時の順で並べられているのであるから四季の運行以上の法則として陰陽五行が位置づけられていることに注意されねばならない。『訓民正音』が陰陽五行に基づいて作られたという時、いわば宇宙の法則によってできた文字であるからこそ、宇宙のすべてを文字で表現できるという意識につながる。「五行の生ずるや、各の其の性を一にす。無極の真、二・五の精、妙合して凝る」といい無極と陰陽と五行とは、その場に同時に存在することが明言されている。無極、太極、陰陽、五行のそれぞれはひとつのものが時間的経過によって変化してそれぞれのすがたをみせるのではなく、同時に同所にある万物を形作っていることになる。そして、無極の真、すなわち太極の真と、二五の精、すなわち陰陽五行の精とが凝って人間になっていると表現する。この言葉は『訓民正音解例』においても引用されて用いられる人間観となっている。

無極之真、二五之精、妙合而凝¹³

(無極の真、二五の精、妙合して凝る。)

『訓民正音解例』に表れるこの表現は『太極図説』に根拠があり、朱子学の理論で『訓民正音』ができていることの傍証となる。

「乾道、男を成し、坤道、女を成し、二氣交感して萬物化成す。萬物生生して變化窮まり無し」として万物はこうした無極、陰陽、五行から生成していると語る。『訓民正音』は万物を表現できるという意識のもとをここにも見出すことができる。「惟だ人のみ、其の秀を得て、最も靈なり。形、既に生じ、神、知を發す。五性感動して、善惡分かれ、萬事出づ」として人間を陰陽五行の秀を得たものとし、万物の靈物と位置づける。人間の中でも聖人が人極を立てる。聖人は天地とその徳を合して天地人の三才を形成する。「聖人、之を定るに中正仁義を以てして、静を主として人極を立つ。故に聖人と天地と其の徳を合し、日月と其の明を合し、四時と其の序を合し、鬼神と其の吉凶を合す。君子これを修めて吉、小人これに悖りて凶」という。こうして人間は天にも地にもつりあう極をなすとする。ここに天地人の三才が明示される。『訓民正音』では天地人の三才をもとに母音字母を象形していることが想起される。三才によって文字を形成する『訓民正音』は、ここにおいても朱子学をもとに成立しているということが出来る。「故に、天の道を立てて曰く、陰と陽と。地の道を立てて曰く、柔と剛と。人の道を立てて曰く、仁と義と」という言葉には三才が明確に表現され

ている。「又曰く、始めを原て終りに反る、故に死生の説を知ると」といい、「原始反終」が語られる。はじめのものがおわりになって、おわりのものがはじめになるという、万物の循環をあらわす。『訓民正音解例』では子音字母が初声となり終声となることを、同じ趣旨で語っている。「大なるかな易や。ここに其れ至れり」と『易経』の循環の論理が現れる。

時代は少し下るものの、李朝の大儒李退溪（1501－1570）は彼の『聖学十図』の冒頭第一図に『太極図説』を掲げている。朝鮮朝の朱子学における陰陽五行と人間との関係について考える時、次のようにいうことが注目される¹⁴。

朱子曰、圖説、首言陰陽變化之原、其後即以人所稟受明之。自惟人也、得其秀而最靈、純粹至善之性也、是所謂太極也。形生神發、則陽動陰靜之為也。五性感動、則陽變陰合、而生水、火、木、金、土之性也。善惡分、則成男、成女之象也。萬事出、則萬物化生之象也。至聖人定之以中正仁義而主靜、立人極焉、則又有得乎太極之全體、而與天地混合無間矣。故下文又言、天地、日月、四時、鬼神、四者無不合也。又曰、聖人不假修為而自然也。未至此而修之、君子之所以吉也。不知此而悖之、小人之所以凶也。修之悖之、亦在乎敬肆之間而已矣。敬則欲寡而明理、寡之又寡、以至於無、則靜虛動直而聖可學矣。

（朱子曰く、圖説の首に陰陽變化の原を言ひ、其の後、即ち人の稟受する所を以て之を明かにす。惟人也、其秀を得て、最も靈なりよりは、純粹至善の性なり。是れ所謂、太極なり。形生じ、神發すれば、則ち陽動陰靜の為すなり。五性感動すれば、則ち陽變じ陰合して、水、火、木、金、土の性を生ずるなり。善惡分れば、則ち男と成り、女と成るの象なり。萬事出づれば、則ち萬物化生の象なり。聖人、之を定めるに中正仁義を以てし、靜を主として、人極を立つに至れば、則ち又た太極の全體を得ること有りて、天と地と混じり合ひて間無し。故に下文に又た言ふ。天地、日月、四時、鬼神の、四者合はざる無きなり。又た曰く、聖人は修為を假らずして自然なり。未だ此に至らずして之を修むれば、君子の吉なる所以なり。此を知らずして之に悖れば、小人の凶なる所以なり。之を修め之に悖るは、亦た、敬肆之間に在る而已矣。敬すれば則ち欲寡くして理を明らかにす、之を寡くして又た寡くして、以て無に至れば則ち靜虛動直にして聖、學ぶ可きなり。）

「朱子という、太極図説のはじめには陰陽変化のもとを言い、そのあとで、ただちに人が稟受する所によってこれを明らかにする。惟だ人だけが太極陰陽五行の秀を得て、最も靈であるというところからは、純粹至善の性である。是れはいわゆる、太極である」と冒頭に述べる。ここからすれば太極は全ての場所、物に同時に存在することになる。「形が生じ、神が発するは、陽が動じ、陰が静まることが為すのである。五性が感じ動けば、陽が変じ陰が合して、水、火、木、金、土の性を生ずるのである」という解釈がなされている。物が生じ感覚があるのは陰陽五行の働きであると、陰陽五行の役割を説明する。さらに「善惡が分れるというのは、男と成り、女と成る象である。萬事が出るというのは、萬物化生の象である」とする。「聖人が、これを定めるのに中正仁義を以てし、靜を主として、人極を立てるというのに至れば、また太極の全體を得ることが有って、天と地と混

じり合っすきまが無い」と人極をなす聖人について記す。「だから下文にまた言っている。天地、日月、四時、鬼神の、四者は合はないことがない。またいう、聖人は修為を假らないで自ら然るのである。未だ此に至らないときに、これを修めるといのは、君子が吉である理由である。これを知らないで、これに悖るといのは、小人が凶である理由である。之を修め、之に悖るといことは、また、敬肆の間に在るだけなのである。敬すれば欲が寡くなって理を明らかにする。これを寡くしてまた寡くし、以て無に至るならば静虚動直にして聖であること、学ぶ可きである」として、陰陽五行と人間存在、人倫の在り方を記している。

李退溪は『聖学十図』の「第一太極図」の説明に続けて太極図の重要性を語る。

右濂溪周子自作圖並説、平巖葉氏謂此圖即《繫辭》“《易》有太極、是生兩儀、兩儀生四象之義、而推明之。但《易》以卦爻言、圖以造化言。朱子謂此是道理大頭腦處、又以為百世道術淵源。今茲首掲此圖、亦猶《近思錄》以此說為首之意。蓋學聖人者求端自此、而用力與小、大學之類。及其收功之日、而逆極一源、則所謂窮理盡性而至於命、所謂窮神知化、德之盛者也。

(右は濂溪周子、自ら圖、並びに説を作る。平巖葉氏、此の圖、即ち『繫辭』に即きて、「易に太極有り、是れ兩儀を生ず。兩儀、四象を生ず」の義にして、之を推明す。但だ『易』は卦爻を以て言ひ、圖は造化を以て言ふ、と。朱子、此れを謂ひて、是れ道理の大頭腦の處、又た以て百世道術淵源を爲す、と。今茲に首めに此圖を掲ぐるは、亦た猶ほ『近思錄』の此の説を以て首の意と爲すがごとし。蓋し聖人を學ぶ者、端を求ること此れ自りして、力を小、大學の類に用ひて、其の功を収むる日に及びて、逆極一源に逆れば、則ち所謂、窮理盡性して命に至る。所謂、窮神知化、德の盛なる者なり。)

「右は濂溪周子が自ら図ならびに説を作った。平巖の葉氏は、『この図は『繫辭伝¹⁵』の『易に太極あり、これ兩儀を生ず、兩儀四象を生ず』の義であって、これを推明したもので、ただ易は卦爻を言い、この図は造化をいう』とする」と、葉平巖の言を引く。また「朱子は、『これは道理の大頭腦のところであり、また百世道術の淵源である』という」と、朱子の言を引用する。李退溪は「道理の大頭腦」「百世道術の淵源」であるとまで言い切つて朱子に倣つて太極図を冒頭に掲げたことわるのであるから、その位置づけの重要度が理解される。

(2) 李朝と朱子学の導入

李朝において朱子学が導入されたのは李朝を開いた太祖の李成桂(1335-1408、在位1392-98年)の時代の、鄭道伝(?-1398)によるところが大きい。高麗末から李朝初にかけて朱子学者による抑仏崇儒の動きがあった。高麗末にはすでに鄭夢周(1337-1392)らは「東方理学の祖」と仰がれている。李成桂を擁立して朱子学の理想を実現しようとしたのが鄭道伝であった。『朝鮮経国典』『經濟文鑑』などを記し、李朝の制度を儒教理念によって制定した。第四代の世宗の治世も、朱子学の理念によって支えられていて『訓民正音』が朱子学の陰陽五行論を適用して制定されているのは

時代背景としても当然であった。

3 文字に表れる人間観

（1）人間の本質

先に見たように『訓民正音解例』においては、人間を、陰陽五行の秀を得て最も靈なるもの、陰陽五行の精が凝ったものと捉えられている。そこで、『訓民正音』『訓民正音解例』に表れる人間観を見ておきたい。発音も言葉も人間のものです、それを記す文字もまた人間、万物を表しうるものであった。人間は万物の靈であるとされる。

無極之真，二五之精，妙合而凝
（無極の真，二五の精，妙合して凝る。）

この把握は太極図説の言を引くもので『太極図説』の人間把握と共通している。

（2）人間の役割

天と地とは太極，そして陰陽五行によって生成し，人間もまた陰陽五行の精が凝ったものとするとき，人間は天地人と徳を合する。『訓民正音解例』では天地人のそれぞれの在り方について次のように言う。

天，「発動之義，天之事也」「動者天也」「五行在天則神之運也」
地，「止定之義，地之事也」「静者地也」「（五行）在地則質之成也」
人，「兼乎動静者人也」「天地生成萬物，而財成輔相則必頼人也」
「（五行）在人則仁禮信義智，神之運也，肝心脾肺腎，質之成也」
（天，「発動の義は，天の事なり」「動く者は天なり」「五行は天に在れば則ち神の運ぐるなり」）
（地，「止り定まるの義，地の事なり」「静なる者は地なり」「（五行は）地に在れば則ち質の成るなり」）
（人，「動静を兼ねる者は人なり」「天地は萬物を生成して，財成輔相するは則ち必ず人に頼るなり」「（五行は）人に在れば則ち仁禮信義智，神の運ぐるなり。肝心脾肺腎，質の成るなり」）

天については，「発し動くということは，天の事である」「動くものは天である」「五行が天に在れば神がめぐるのである」という。地については，「止り定まるというのは，地の事である」「静かなるものは地である」「（五行が）地に在れば，質が成るのである」という。人については，「動静を兼ねるものは人である」「天地は萬物を生成して，その財成輔相をするものとして必ず人によるのである」「（五行は）人に在れば仁禮信義智であって，神がめぐるのである。肝心脾肺腎は，質が成るのである」という。天は発し動きくすしき力たる神がめぐっている存在であって，地は止まり定まっ

て静かで、質が成るものであって、人はここに仁禮信義智という神がめぐっており、肝心脾肺腎という質が成った臓器肉体を持っているとする。両方の性質を有する存在は両者を統治し完成することができる。こうして天地人を並べて人は天地に参して両者の性質を共に有する者、すなわち両者をつなぐものであることが示されている。これは朱子学の人間把握によっているものということができる。特に人は天地の「財成輔相」をなすものと考えられていて、文字にもその考え方が反映する。

(3) 字母と陰陽五行

『訓民正音』及び『訓民正音解例』の原文に則して、字母の象形と意味をここで再確認しておきたい。

『訓民正音』においては、初声=子音、中声=母音、終声=子音（支えるもの）の組合せで、文字が構成される。母音字母11と子音字母17の28字母を要素とする。

①中声と陰陽、三才

中声とは子音と子音とによって挟まれた中にある音を意味する。母音の表記と言い換えることができる。

・ 「舌縮、而聲深、天開於子也、形之圓、象乎天也。」

一 「舌小縮、而聲不深不浅、地闢於丑也、形之平、象乎地也。」

丨 「舌不縮、而聲浅、人生於寅也、形之立、象乎人也。」

「始於天地、為初出也。」「天地初交」「取天地之用、發於事物、待人而成也。」

「一其圓者、取其初生之義也。」

「起於丨而兼乎人、為再出也。」「二其圓者、取其再生之義也。」「皆兼乎人者、以人為萬物之靈而能參兩儀也。」

(・は「舌縮みて聲深く、天は子に開くなり、形の圓きは、天を象るなり。」

一は「舌小さく縮みて、聲は深からず浅からず、地は丑に闢くなり、形の平らかなるは、地を象るなり。」

丨は「舌縮まずして、聲浅く、人は寅に生るなり、形の立つは、人を象るなり。」

「天地より始まるは、初出を為すなり。」「天地初めて交る」「天地の用を取る、事物に發して、人を待ちて成るなり。」

「其の圓を一にする者、其の初生の義を取るなり。」

「丨より起こりて人を兼ぬ、再出を為すなり。」「其の圓を二にするは、其の再生の義を取るなり。」「皆人を兼ぬるは、人を以て萬物の靈にして能く兩儀に參すればなり。」

「・」で示される母音は「舌が縮んで発音され発声は喉の奥深くで調音される。天は子の時に開くのであり、形がまるいのは、天を象るからである」と説明する。

母音「一」は「舌がすこし縮んで発音され、発生は喉の深くもなく浅くもないところで調音され、地は丑のときに開くのであり、形が平らなのは、地を象るからである」と説明する。

母音「丨」は「舌が縮まないで、声が喉の浅いところで調音され、人は寅の時に生れるのであり、形が立っているのは、人を象るからである」と説明する。天地人に相当する母音字母がまず象形され、この三者を組み合わせることで、母音字母がさらに形成される。「天地から始まるのは、初めて（世に）出ることをあらわすのである」「天地が初めて交るのである」「天地の用を取って、事物に発して、人を待って成るのである」「その丸い点がひとつであるのは、その初生の義を取るのである」「丨より起こって人を兼ねるのは、再び出ることをしめすのである。」「その丸い点を二つにするのは、その再び生れるという意味を取るからである」「皆な人を兼ねているのは、人が万物の靈であって天地に参ずることができるからである」と述べられる。易の論理によって、『河図』を援用しながら、三才の要素から中声の説明がなされていて、人間が天地とつながって事物を完成させる役割を持つものであることが語られている。

②初生と五行

初声とは初めに発する音を意味する。子音の表記と言い換えることができる。

「ㄱ 象舌根閉喉之形。」「木之萌芽」「木之成質」「木之盛長」「木之老壯」

「ㄴ 象舌附上腭之形。」

「口 象口之形。」

「入 象齒之形。」

「ㅇ 象喉之形。」

（ㄱ 「舌の根の、喉を閉づる形を象る。」「木の萌芽なり」「木の質を成すなり」「木の盛長なり」「木の老壮なり」）

（ㄴ 「舌の上腭に附く形を象る。」）

（口 「口之形を象る。」）

（入 「齒之形を象る。」）

（ㅇ 「喉之形を象る。」）

五行は木・火・土・金・水を要素とし、発声器官にあつては牙・舌・唇・齒・喉をこれに当てる。木徳である「牙音」は「舌の根が喉を閉じる形を象る」と説明され、牙音の軟口蓋音は「木の萌芽である」とし、平音は「木の質を成すのである」とし、激音は「木の盛長である」とし、濃音は「木の老壮である」とする。以下それぞれに平音、激音、濃音があるけれども、象形の基本のみが語られる。「舌音」は「舌が上腭に附く形を象る」と説明される。「唇音」は「口の形を象る」と説明される。「齒音」は「齒の形を象る」と説明される。「喉音」は「喉の形を象る」と説明される。こうして、初声、終声をあらわす子音字母は、あきらかに五行によって発声器官を象形して説明されていることがわかる。しかも五行の循環に合わせて説明がなされている。

おわりに

世宗大王は、『訓民正音』を制定し、「序」において、「ひとびとにたやすく習わせ日用に便であるようにさせたいとねがうだけである」という。文字を知らないひとびとのために日用に便であるように文字を制定しただけであると、他意がないことをいう。しかしながら中国とは異なる文字を新たに制定することには「国」の独自性が打ち立てる政策の一環が表れる。世宗大王は「至誠事大」を標榜しながらも、外交的には強い独自性を持って対外的に対処して「序」には独自性の確立の意図がみられる。

『訓民正音解例』では『訓民正音』は人為で作られたものでないことが強調されている。世宗の意思を受けて人知を傾けて制作した文字でありながら、制作に関わった学者の言葉として、天の道理を反映して自然にできたものであると語られる。「中国」や「朝鮮」という「国」を越え出た「天地の道理」が『訓民正音』に表れているとし、天の理は具体的には陰陽五行論をさす。陰陽五行は儒教文化の精髓でもあるととらえられていて、道理を反映した文字は世のすべてを文字に表現できるという自負心を内包する。陰陽五行は『尚書』『洪範』に殷の王家の一族である箕子が武王に伝えた内容であるとされ、儒学による王化の精髓が、孔子、孟子のはるか以前に箕子によって「朝鮮」に流れ込んでいたことを意識される。武王は治民の常道を順序立てる方法を知らないので箕子に教えを乞い、これによって周の統治が整ったという。『尚書』『洪範』で語られるのが五行論で、李朝儒学の朱子学において、陰陽五行論は世界の把握の基本でもあった。

朱子学においては、陰陽五行が本体論とも言うべき「太極」とかかわって述べられる。天は発し動きくすしき力たる神がめぐっている存在であって、地は止まり定まって静かで、質が成るものであって、人はここに仁禮信義智という神がめぐっており、肝心脾肺腎という質が成った臓器肉体を持っている存在であって、両方の性質を有する人間は天地万物を統治し世界を完成することができる。こうして天地とともに人は天地に参して両者の性質を有して天地を財成輔相する存在者であることが明らかに示されている。朱子学の人間把握が、文字にもその解釈にも反映する。

(こばやし・ひろし つくば国際大学非常勤講師)

註

- 1 本稿は『訓民正音解例』の人間観が朱子学陰陽五行論に基づくものであることに焦点を当てて論じた。韓国語教育に資するための『訓民正音』の人間観については、拙稿「韓国語教育に資する『訓民正音』の陰陽五行論」を参照されたい。
- 2 「癸亥冬」(1443年12月)に成立し、「正統十一年九月上澣」(1446年上旬)に公布された。陰暦を陽暦に換算すると1444年に成立したとされる場合もある。
- 3 『訓民正音解例』鄭麟趾後序を参照されたい。
- 4 同上
- 5 姜信沆『ハングルの成立と歴史』大修館書店1993年「付録1」『訓民正音(海嶺本)原文』『序』

378頁を参照されたい。以下『訓民正音解例』の引用について、特に断らなければ、この書に依る。

- 6 『訓民正音解例』370頁を参照されたい。
- 7 『太極図説解』田奕『十三経索引』中国社会科学出版社2004年を参照されたい。以下、経書について、特に断らなければこの書に依る。
- 8 『訓民正音解例』「制字解」343頁を参照されたい。
- 9 例えば、東京大学中国哲学研究室編『中国思想史』東京大学出版会1952年等を、参照されたい。
- 10 『尚書』「洪範」を参照されたい。
- 11 現在の韓国の教育現場では伝承であって事実ではないとされる。
- 12 『太極図説』を参照されたい。
- 13 『訓民正音解例』358頁を参照されたい。
- 14 李退溪（1501～1570）、諱は滉、字は初めは季浩、後に景浩、退溪・退陶はその号、文純と諡号されている。『退溪先生年譜』には「先生姓は李、名は滉、字は景浩、真城の人、学者は退溪先生と称す」とある。「明の孝宗の弘治十四年辛酉11月25日己亥（1502年1月3日）」に生まれ、燕山君・中宗・仁宗・明宗・宣祖の代に生き、「（明の穆宗の隆慶四年）12月辛丑（八日、1571年1月3日）」に没する。『聖学十図』は十七歳の新帝宣祖（1552～1608、在位1568～1608）が即位した年に68歳の李退溪がその修養の資として献上したものであった。第三・五・六の中下図・十図が退溪の作図になる。第四図補説に「十図は皆敬を以て主と為す」ものであると説く。
- 15 『易経』「繫辭伝」を参照されたい。

In-Yang, Wo-Xing Theory in ‘Hunminjeongum- HyeRye’

Hiroshi Kobayashi

“Hunminjeongum (訓民正音)” was made in December, 1443. It was proclaimed in 1446.

It's thought that Chon In-Ji (鄭麟趾) participated in creation of “Hunminjeongum”.

He explained the character of “Hunminjeongum” by a book called “Hunminjeongum – HyeRye (訓民正音解例)”.

The book explains the character by man recognition of orthodox Neo-Confucianism.

This Paper indicates “view of man” of the Theory of Yin-Yang (陰陽) and the Five Elements (五行) in orthodox Neo-Confucianism. A view of man of orthodox Neo-Confucianism had an influence on “view of man” of “Hunminjeongum – HyeRye”

Keywords: Hunminjeongum (訓民正音) Hunminjeongum–HyeRye (訓民正音解例) Chon In-Ji (鄭麟趾)
In-Yang and Wo-Xing Theory (陰陽五行)